

書評

ビエール・ジョルジュ著

本岡武共訳『世界の農業地理』
山本修

一九五六年
一三五頁

逸見謙 三

本書はクセジュ文庫の一冊として出された Pierre George,

Géographie Agricole du Monde, 3^e edit, 1952 の完訳である。

これはわが国の農業研究の分野では比較的乏しいフランス語系統の文献の紹介であり、また長い伝統を有するフランス人文地理学の最近の業績でもあるので、その訳出は、いわば必要をみたすものとして歓迎されるのである。われわれは訳者の労を多しななければならぬ。私は以下の書評を農業研究者の立場からなし、地理学者の立場からなすのではないことを最初に断りたいと思う。

第一に指摘したいのは、世界農業の概観を文庫版一三〇頁余に収めているということである。少い頁に収めるというクセジュ文庫の要求は、本書にかなりの負担をかけている。例えば本書はフランス中心に書かれており、フランスから遠い地方は簡単にふれ

書評 ビエール・ジョルジュ『世界の農業地理』

られているに過ぎない。本書は第一部「農業地理の条件」、その応用たる第二部「世界の農地と農民」との二部に分たれているが、第二部約七〇頁のうち、三〇頁はヨーロッパ農業にあてられ、そのまた半分の一五頁がフランス農業にあてられている。フランスに関する叙述に限り、国内を更に地域別に分けて論じている。また著者の主張に基づく省略もある。著者は「はしがき」で、

「世界各地の収量の統計を作成したり、生産国と消費国とを分類したり、農産物輸送の流れを解明したりすることは、経済地理学に属する。」

著者は、…『世界の社会地理学』において、人間の諸集団と地の耕作に基礎をおくその物質的精神的文明とをとりあつた。本書では耕作農民をとりあげ叙述することにしよう。」と述べている。即ち本書は経済地理学の一部としての農業地理学ではなくて、社会地理学の一部としての農業地理学なのである。このため、一部の例外、例えばアメリカ（一〇三頁）やソ連（一二五頁）の農産額の世界の農産額に占める比重の説明、を除けば、本書の記述は極めて非数量的である。農産額の分布も、作物別土地利用の分布も部分的にしか出てこない。本書のこの主張には異論の存するところであらう。

第二、本書の方法論的立場は第一部に述べられている。それは、訳者も指摘しているように、自然条件への人間の適応・克服

の過程として農業を把握することである。それは「空腹がいかなる手段をも正当化する」（五四頁）労働生産性を全く無視した段階から始まる。これを作物の側から見ればある意味での適者生存の過程である。「すぐれた植物が劣つた植物にとつてかわる」（一九頁）のである。この過程のあらわれの地理的差異として論じる立場は十分にありうるし、事実ある程度成功している。成功しているという意味は、現存の農村社会というものを、前資本主義、資本主義、社会主義等の諸制度の枠内で論じながら、上述の過程のあらわれの地理的差異を述べていることである。

これは、資源の最適配分 optimum allocation of resources ないしは立地論の立場に立つ地理的説明——最近はこの傾向が多くなつてきていると考えるが——に対するものとして、自然ないし環境に対する人間の働きかけ man against nature の地理的説明である。ミントは経済学でこのように区別している。だからジョルジュの立場は一般にも認められている立場の地理学への応用なのである。問題はこの立場が各地域について必ずしも貫かれていないという点である。例えば第二部第三章「伝統的農業」では、伝統の意義の述べられること甚だしい。

最後に若干の不満を述べよう。第一は叙述の不明瞭さである。例えば、フランスのブルターニュやアキテーヌ地方の多角的経営

が、生産力は低いいけれども土地面積あたり多くの人口を維持していることの説明として次の二条件をあげている（七九頁）。

「第一に古い形の多角的耕作は、土地に最も多くの人間を引きつけておく農業形態である。だから、農民的タイプを存続させている。第二に、しかしそれはまた、合理的耕作の収量とせいぜいひとしいか、多くの場合には明らかに少ない収量をあげるために、より多くの労働力を必要とする。」

と。この両者をいかに区別すべきか。また例えば、技術進歩の努力が「とくに果樹の生産期間の延長」（四九頁）に向けられた（これは結果期間の延長ではない——五一頁参照）ということはどういうことなのか。

第二点は、第二部第二章第二節の「熱帯地方におけるヨーロッパ的農業」の地域と、第三章「伝統的農業」との相異、相互の地域的分布等が極めて不明瞭なことである。特に前者の中に原住民による商品作物の輪作への導入（一〇四頁）を含め、しかも伝統的農業にも多少の改善を認める（五九頁）とき、その相異は現実の各地の農業の分類の際にはますます不明瞭なものとなる。